

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集

市内遺跡発掘調査概要報告書IX

西都原地区遺跡
日向国分寺跡

2004

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では、市内遺跡発掘調査として平成7年度より日向国分寺跡確認調査、平成10年度より西都原地区遺跡確認調査を実施しております。本書は、それら遺跡調査の概要報告書であります。

今回の調査で西都原地区遺跡につきましては、第69地点で縄文時代早期の集石遺構をはじめ、西都原台地上では珍しい縄文時代晚期の竪穴式住居跡、また、第81地点では古墳時代初頭から前期頃を中心とした竪穴式住居跡群を検出し、大集落の存在を確認することができました。

また、日向国分寺跡では、昨年度までの調査で主要伽藍に取り付く3時期にわたる中門跡及び四脚門跡、中門跡から東西に延びる2時期の回廊跡、北東側に2時期の推定食堂跡などが確認されております。

今年度は主要伽藍内の中心建物の確認を目的に調査を実施し、主要伽藍中軸線上に桁行き7間、梁行き4間の講堂跡と予想される掘立柱建物跡を確認することができました。また、主要伽藍東側からは、安芸国分寺跡で確認されている「東方建物群」と同様な掘立柱建物跡も確認できました。

これら調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なものです。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたりご指導・ご協力いただいた調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業に携わっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成16年3月31日

西都市教育委員会
教育長 黒木 康郎

例　　言

- 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受け、平成15年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
- 平成15年度の確認調査は、西都市大字三宅字西都原に所在する西都原地区遺跡内（たばこ耕作に伴う天地返し地点）、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡の3地区を対象に実施した。調査は平成15年7月22日から平成16年3月末まで実施する予定であり、第IV章は3月上旬までの調査をもとに作成した。
- 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
- 調査及び図面作成等については、義方政幾・笠瀬明宏が担当した。
- 本書の執筆・編集は、第I・II章は義方政幾・笠瀬明宏、第III章は義方政幾、第IV章は笠瀬明宏が担当した。
- 本書に使用した方位は、Fig. 1・2・11・15が平面直角座標系第II座標系であり、Fig. 3・4・6・10・12～14は磁北である。この地点の磁北は真北より $6^{\circ} 10'$ 西偏している。
- 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
- 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版 標準土色帳』に準拠した。
- 本文中の(註)は第II章に全てをまとめて記した。

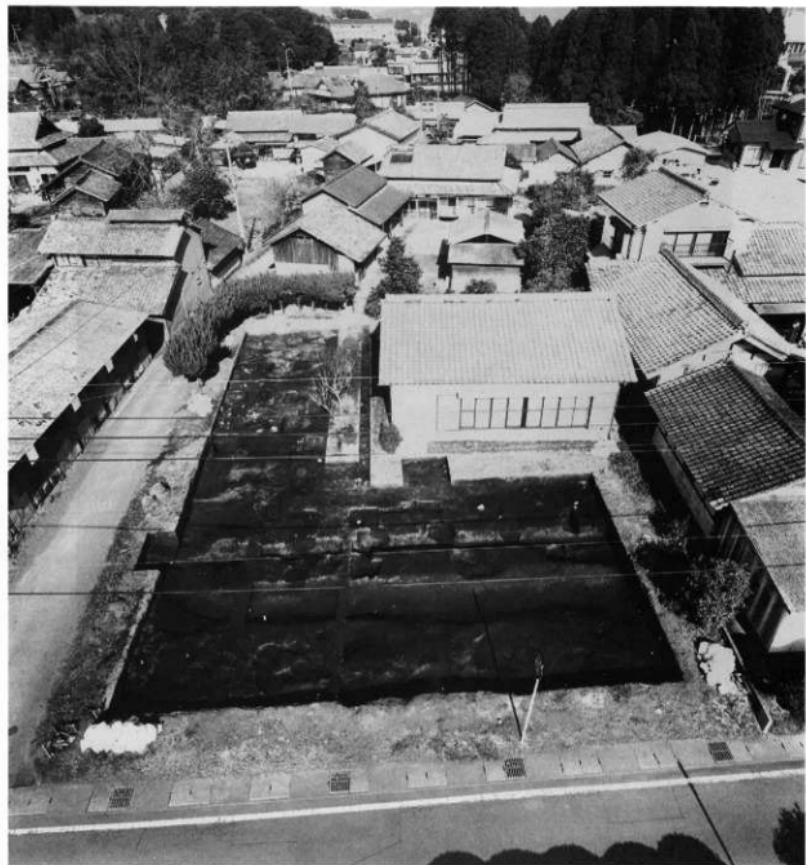
目　　次

挿図目次

第I章 序説		Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図(s=1/25,000)
第1節、調査に至る経緯	1	Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図(s=1/10,000)
第2節、調査の体制	1	Fig. 3 第69地点遺構分布状況(s=1/400)
第II章 遺跡の位置と歴史的環境	2	Fig. 4 集石遺構実測図(s=1/40)
第III章 西都原地区遺跡の調査		Fig. 5 第69地点出土遺物実測図(s=1/2)
第1節、調査区の設定と概要	5	Fig. 6 第69地点堅穴式住居跡実測図(s=1/40)
第2節、調査の記録	7	Fig. 7 第69地点堅穴式住居跡内出土遺物実測図(s=1/2)
第3節、小結	12	Fig. 8 第69地点 2号土壙実測図(s=1/40)
第IV章 日向国分寺跡の調査		Fig. 9 土壙内出土遺物実測図(s=1/2)
第1節、これまでの調査結果と概要	13	Fig. 10 第81地点遺構分布状況(s=1/200)
第2節、調査区の設定と遺構	15	Fig. 11 日向国分寺跡第9次調査箇所位置図(s=1/1,000)
第3節、小結	20	Fig. 12 日向国分寺跡第9次A区遺構実測図(s=1/100)
第4節、日向国分寺跡の伽藍配置について	21	Fig. 13 日向国分寺跡第9次B区遺構実測図(s=1/100)
報告書抄録		Fig. 14 日向国分寺跡第9次C区遺構実測図(s=1/100)
		Fig. 15 日向国分寺跡推定伽藍復元図(s=1/1,200)



西都地区遺跡(第69地点周辺)遠景(北上空より)



日向国分寺跡第9次A区全景(南上空より)

第Ⅰ章 序 説

第1節. 調査に至る経緯

西都原地区遺跡の発掘調査については、たばこ耕作の天地返しに伴い実施したものであり、平成10年度からの継続事業である。このことについては、天地返しの地下構造に与える影響は大きく、遺跡の消滅が懸念されることから、たばこ耕作組合と協議を重ねてきたが、生産者の生活権等を考慮すると現状保存が困難であると判断し、重要な遺構・遺物が検出された場合には現状保存を前提とした協議をすることを条件に今年度も調査を実施することとなった。

調査は、新たに天地返しが予定されている2箇所（第81・82地点）の確認調査と昨年度に焼廻群や竪穴式住居跡を検出した第69地点、そして、今年度の確認調査で竪穴式住居跡を検出した第81地点の本調査を実施した。調査期間としては、耕作物との関係で平成15年8～12月までの間で調整しながら進めた。

一方、日向国分寺跡の調査は、西都市教育委員会が調査を始める以前に3度調査が実施された。

まず、昭和23（1948）年に駒井和愛教授を団長とした、主として早稲田大学で組織された日向考古調査團により、その後、昭和36（1961）年及び平成元年度には宮崎県教育委員会により発掘調査が実施された。しかし、それら調査では僧坊跡ないし食堂跡（平成元年度）と推定される2時期の掘立柱建物以外には、その主要伽藍配置について明確にされていない。

当地域は、昭和36年当時の周辺写真と現在では寺域内外の宅地化が著しく、畠地や空き地の確保も困難となり、伽藍配置の確認が急務である。このことから、西都市教育委員会が平成7年度より主要伽藍配置及び寺域の確認調査を実施してきた。今年度も、この継続として調査を実施した。

第2節. 調査の体制

調査主体 教育長 黒木康郎
文化課長 森 康雄
同補佐村岡満徳
同主任鹿嶋修一
同主任津曲大祐

調査員 文化課係長 斎方政幾
同主任 签瀬明宏

調査指導 塚田佳男（文化庁記念物課）、小田富士雄（福岡大学人文学部教授）、山中敏史（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）、日高正晴（西都原古墳研究所長）、柴田博子（宮崎産業経営大学助教授）、石川悦雄・和田理啓（宮崎県教育庁文化課）
以上、敬称略

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西、標高50～80mには通称西都原と呼ばれる台地がある。この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積台地である。台地東側には南北帶状に標高約20～30mの中間台地が延び、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。西都市街地は、この沖積平野に位置し、この平野の北から東側を宮崎県で第3位の水量を誇る一つ瀬川が蛇行する。

西都原台地及び中間台地上には、陵墓参考地である男狹穂塚・女狹穂塚を始め、前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された国指定特別史跡・西都原古墳群が所在する。これら古墳の他に、南九州的墓制とされる地下式横穴墓が現在までに12基、斜面に墓道が斜めに穿たれ、それに玄室が取り付く構造で横穴墓と地下式横穴墓の折衷型とされる横穴墓群も確認されている。

西都原台地の北西側には、縄文早期の集石遺構及び後期の土器片・土錐が多く量に検出された宝財原遺跡、台地北東端には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡20軒などが検出された集落跡である新立遺跡などが所在している。西都原台地が墓域として遷地されてから台地上の生活遺構は極端に減少するが、台地南端の寺原集落には古墳時代の大集落跡が所在していることも予想されている。

西都原台地北東側の中間台地には、平成12～13年度にかけての調査で地下式墓寄生型消失円墳や消失円墳を始め、多くの地下式横穴墓が点在していることが明らかになった堂ヶ嶋第2遺跡も所在する。本遺跡の調査により、西都原台地東側中間台地一帯が墓域であることも明らかになった。

西都原地区遺跡は西都原台地上に所在し、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼称である。原口遺跡は台地南側、寺原遺跡は原口遺跡の北側で、現在の寺原集落を中心とした地域、丸山遺跡は台地北側、西都原遺跡は台地中央部から東側にかけての地域である。これら遺跡の内、丸山遺跡からは縄文時代早期の集石遺構や弥生時代中期から後期初頭の竪穴式住居跡、原口遺跡からは丸山遺跡同様に縄文時代早期の集石遺構や弥生時代後期後半から終末期及び古墳時代後期の竪穴式住居跡、西都原遺跡からは弥生時代後期の竪穴式住居跡、また、寺原遺跡からは弥生時代終末期の竪穴式住居跡などが確認されている。

西都原台地の南端には產土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になる。この中間台地上には北に日向国衙跡、南東の妻高等学校敷地内に日向國分尼寺跡（推定）も保存されている。

日向國分寺跡は、西都原台地と西都市街地の中間に抜がる中間台地上に位置する。北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷に囲まれ、寺域は方2町の規模を有すとされてきた。現在では宅地化が進み、現在の木喰五智館内に展示されている木喰仏を以前安置していた堂宇の礎石、金堂跡と推定される位置に數個点在する礎石が国分寺の痕跡を残すのみである。

また、國分寺跡は國府の近くに置かれるのが全國的な通例であり、近年、國分寺跡から北東に直線距離で約1.2kmの寺崎・法元地区に、宮崎県教育委員会の調査により日向国衙跡が確定された。国衙跡については、コの字型配置を探り、正殿跡・脇殿跡・樂地堀跡などが確認されている。

このように、西都原台地上はもちろん、日向國分寺跡を含む中間台地は古代日向國の拠点として栄えた歴史的環境をもつ地域である。



- 1. 西都原古墳群
- 2. 御陵墓（男狹徳塚・女狹徳塚）
- 3. 丸山遺跡
- 4. 西都原遺跡
- 5. 寺原遺跡（西都原地区遺跡）
- 6. 新立遺跡
- 7. 原口第2遺跡
- 8. 日向国分寺跡
- 9. 日向国分尼寺跡
- 10. 酒元遺跡
- 11. 寺崎遺跡（日向国衙跡）

Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図(s=1/25,000)

(註及び参考文献)

- (1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949
- (2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺址」『日向遺跡総合調査報告』第3号 1963
- (3) " 『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告書』III 1991
- (4) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書I」
『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996
- (5) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書II』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997
- (6) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書III』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998
- (7) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書IV』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999
- (8) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書V』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第29集 2000
- (9) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VI』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第30集 2001
- (10) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VII』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第31集 2002
- (11) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VIII』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第36集 2003
- (12) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- (13) 西都市教育委員会「宝財原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集 1994
- (14) " 『新立遺跡』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- (15) 西都市教育委員会「堂ヶ嶋第2遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第33集 2003
堂ヶ嶋第2遺跡では、21基の地下式横穴墓の玄室が確認された。それらには単独で所在するタイプと地下式墓寄生型円墳として所在するタイプなどがある。単独で所在する地下式横穴墓は堅坑降口部傾斜角が徐々に倒れていいく傾向にあり、堅坑の意味が「被葬者を玄室内へ入れるために上から下に降ろす坑」から「追葬を行うにあたり墓前祭祀・追善供養などを行う道」へと変化していく課程が想定された。
- (16) 平成5～7年度の圃場整備に伴う調査で1号支線・2号小道路、平成11年度及び平成15年度の天地返しに伴う調査で第10・11・69地点などから検出している。
- (17) 平成5～7年度の圃場整備に伴う調査で2号小道路、平成15年度の天地返しに伴う調査で第69地点などから検出している。
- (18) 平成5～7年度の圃場整備に伴う調査で23号支線道路・B区、平成14年度の天地返しに伴う調査で第65地点などから検出している。
- (19) 平成5～7年度の圃場整備に伴う調査で第33号支線道路から弥生時代後期後半、平成14年度の天地返しに伴う調査で第65地点から弥生時代後期終末頃、原口第2遺跡から古墳時代後期の堅穴式住居跡を検出している。
- (20) 西都原古墳研究所「西都原古墳研究所・年報」第11号 1994
- (21) 住宅建築に伴う調査で、西都原古墳研究所の研究地域内に含まれていたことから実施した。
西都市教育委員会「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集 1985
西都原古墳研究所「西都原古墳研究所・年報」第5号 1988
- (22) 平成12年3月に宮崎県教育委員会より国衙跡と確定された。現在、平成16年度国指定申請に向かっている。
- (23) 西都市教育委員会「鶴目原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集 1989
- (24) " 『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 1989
- (25) 藤岡孝司「安芸国分寺の伽藍配置と紀年銘木簡からみる創建の問題」「シンポジウム 国分寺の創建を考える～安芸国と相模・近江・幾河・伊豆国の事例から～」相模古代史研究実行委員会 2003

第三章 西都原地区遺跡の調査

第1節 調査区の設定と概要

西都原地区遺跡については、これまでに圃場整備をはじめ駐車場整備や道路拡幅工事に伴う発掘調査を行い、縄文時代早期の集石遺構及び焼窯群、弥生時代中期から後期の竪穴式住居跡、古墳時代初頭から前期の竪穴式住居跡、古墳時代の地下式横穴墓、さらには、横穴墓と地下式横穴墓との折衷型として注目された古墳時代後期の横穴墓など各時代を通じた多種多様の遺構を検出している。

これらは、位置的には、そのほとんどが西都原台地縁辺部に集中しており、台地中央部からは弥生時代の竪穴式住居跡が検出されているものの、遺構密度はかなり薄いことが判明している。また、西都原台地上からは古墳の築造に関連した人々の遺構があまり確認されないことから、台地上特に御陵墓の東側を中心とした地域は古墳を築造する特別な空間、いわゆる聖域として認識していたものと想定される。

これら遺構のなかで横穴墓については、現在、県文化課が主体となって進めている「地方拠点史跡等総合整備事業」(歴史ロマン再生事業)で保存・活用されることになり、「西都原古墳群遺構覆屋」(酒元ノ横穴墓群)が建設され、一般公開されている。なお、この事業は平成7年度から進められているもので、これまでに「鬼ノ宿古墳」「13号墳」「100号墳」「171号墳」「地下式4号墳」などの保存整備が図られ、平成16年度の「宮崎県立西都原考古博物館」の完成で事業完了となる。

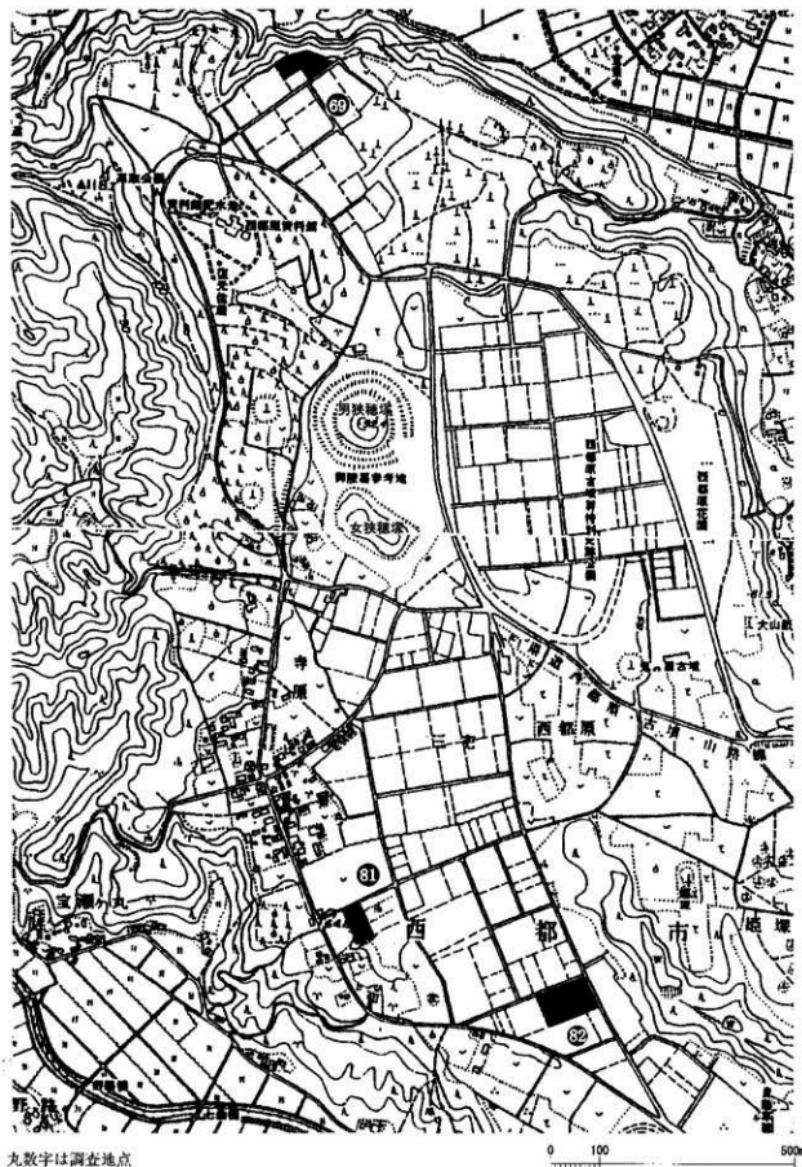
このような中、本年度については、平成10年度からの継続事業として、たばこの天地返しが予定されている畑地の本調査と確認調査を行った。本調査は、確認調査によって遺構・遺物等が多く検出された地点の全面調査で、第69地点と第81地点の2箇所を行った。

確認調査はアカホヤ火山灰層を検出面として、2地点(第81・82地点)行った。幅2mのトレンチを10m間隔に設定して、遺構・遺物の遺存状況等の確認を行った。また、アカホヤ火山灰下層の文化層については、トレンチ内に幅2m×2mのサブトレンチを設定して確認を行った。

確認調査の結果、第81地点には竪穴式住居跡が重複して遺存していることが判明した。よって、地権者と遺構の保存について協議を行い、竪穴式住居跡が集中している北側1/4程度は現状保存となったものの、その他は天地返しをすることで、本調査を実施することになった。なお、第81地点に隣接した北東側畑地--帶は平成5~7年度実施した圃場整備により道路幅の調査であつたにもかかわらず古墳時代前期頃の竪穴式住居跡が21軒も重複して検出され、周辺には大集落跡が存在する地域として注目されていた地域である。第82地点からは遺構・遺物とも検出することはできなかった。

本調査は、昨年度の試掘調査で縄文時代早期の焼窯群や竪穴式住居跡を検出した第69地点と第81地点の2箇所で、調査の結果、第69地点からは、縄文時代早期の集石遺構や焼窯群、縄文時代後期と推定される竪穴式住居跡や弥生時代後期の竪穴式住居跡、第81地点からは、古墳時代の竪穴式住居跡群や溝状遺構等を検出した。これらは、いずれも貴重な発見であり、少しづつではあるが西都原の謎を解く資料が得られ、大きな成果を上げることができた。

なお、第81地点の本調査で検出した竪穴式住居跡群については、最終的には地権者のご好意により、周辺を含めた保存整備に取り組むことで、現状保存することになったが、今後の対応が非常に大きな課題である。



丸数字は調査地点

0 100

Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図 ($s=1/10,000$)

第2節. 調査の記録

1. 遺構と遺物

本調査

(1) 第69地点 (Fig. 3)

第69地点は西都原台地北端部に位置し、昨年度の確認調査でアカホヤ火山灰下層から焼礫群、アカホヤ火山灰層面で竪穴式住居跡を検出した地点である。また、本地点の北側に隣接した農道は平成5年度の圃場整備の際、2号小道路として取り扱った調査区で、集石遺構や弥生時代後期の竪穴式住居跡や土器溜りなどが検出された地点である。さらに、その東側の1号支線道路からは縄文土器とともに多量の焼礫と消失古墳の周溝も確認されている。

調査の結果、遺構として集石遺構2基及び焼礫群・竪穴式住居跡2軒・土壙5基を検出した。

集石遺構 (Fig. 4) は、いずれも掘込みを有するタイプのものであるが、1号は深く2号は浅い。また、2号は床底面の中央に約30cmの平たい礫を2個置き、その周囲に礫を配している。規模的には1号が径1.6m・深さ0.44m、2号が径0.91m・深さ0.16mを計る。1号・2号とも礫は角礫が多く、火を受け赤く変色している。いずれの集石遺構からも遺物は出土しておらず、断定はできないが周辺から貝殻条痕文系土器や無文土器が出土しており、縄文時代早期のものと推定される。

焼礫群は全体的に分布しているが、北側台地縁辺部に集中している。角礫が多く、火を受け赤く変色しているものが多い。遺物は貝殻条痕文系土器 (Fig. 5, 1~3) や無文土器 (Fig. 5, 4~6) の縄文土器を中心に、すり石・石織・剥片などの石器が出土している。

竪穴式住居跡は、アカホヤ火山灰層面にて2軒検出した。1号住居跡 (Fig. 6) は北側が農道により削平されているが、一辺約2.8mの規模を有する方形プランのもので、検出面からの深さ0.33mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。遺物は、胴上部に突帯を巡らし、頸部から外反しながら口縁部に至る壺形土器 (Fig. 7, 7) や胴上部に突帯と円形浮文を有する壺形土器 (Fig. 7, 8) などが出土している。時期的には共伴遺物から弥生時代中期末から後期初頭頃に比定される。

2号住居跡 (Fig. 6) は、径約2.6mの規模を有する円形プランのもので、検出面からの深さは浅く0.12mを計る。床面は平坦であるが、主柱は確認できなかった。遺物は本調査ではほとんど出土しなかつたが、確認調査の際、無文の深鉢形土器 (Fig. 7, 9~10) が数点出土した。時期的には共伴遺物から縄文時代晩期に比定される。

土壙 (Fig. 8) は、いずれも梢円形プランで、規模的には長軸1.42~2.15m、短軸1.28~1.72m、深さ0.26~0.61mを計る。個別的には最大のものが5号で、長軸2.15m・短軸1.47m・深さ0.61m、最小のものが3号で長軸1.43m・短軸1.27m・深さ0.46mの規模を有している。遺物は全体的に少ない。1号からは壺形土器の底部や頸部から口縁部に外反しながら至る壺形土器 (Fig. 9, 11) をはじめ口縁下部に刻目突帯を有する下城系の壺形土器 (Fig. 9, 13~15) などが出土している。その他、3号から壺形土器の底部、4号から3号同様下城系の壺形土器などが出土している。これら土壙の時期については、いずれも共伴遺物などから1号住居跡同様弥生時代中期末から後期初頭頃に比定される。

(2) 第81地点 (Fig. 10)

第81地点は、西都原台地の南西部で、現寺原集落の南側に位置している。対象畠地の1/4が現状保存、2/4は確認調査で何も検出できなかったことから除外、残り1/4の調査を行った。

調査の結果、アカホヤ火山灰層面にて竪穴式住居跡8軒、溝状遺構9条・土壙1基を検出した。

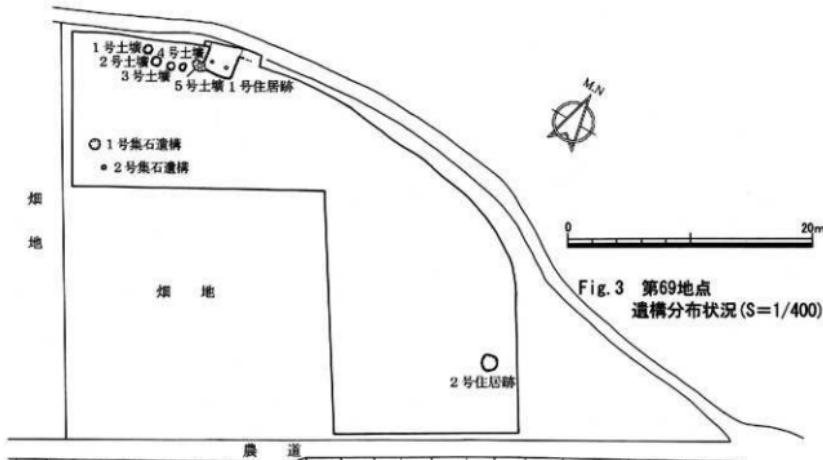


Fig. 3 第69地点
遺構分布状況 ($S=1/400$)

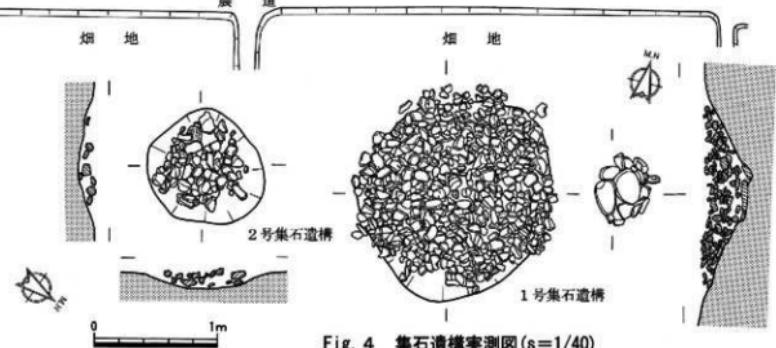


Fig. 4 集石遺構実測図 ($s=1/40$)

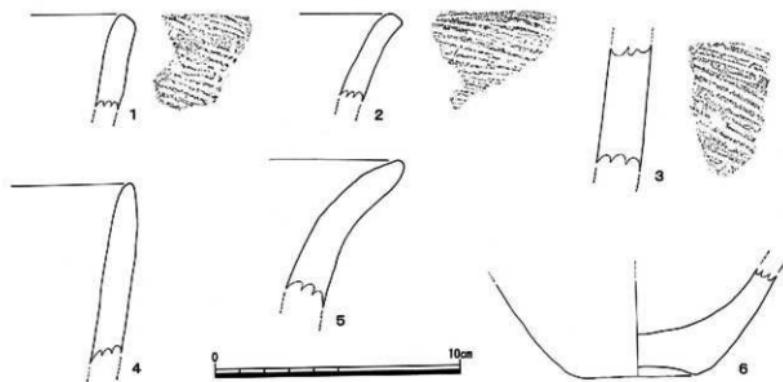


Fig. 5 第69地点出土遺物実測図 ($s=1/2$)

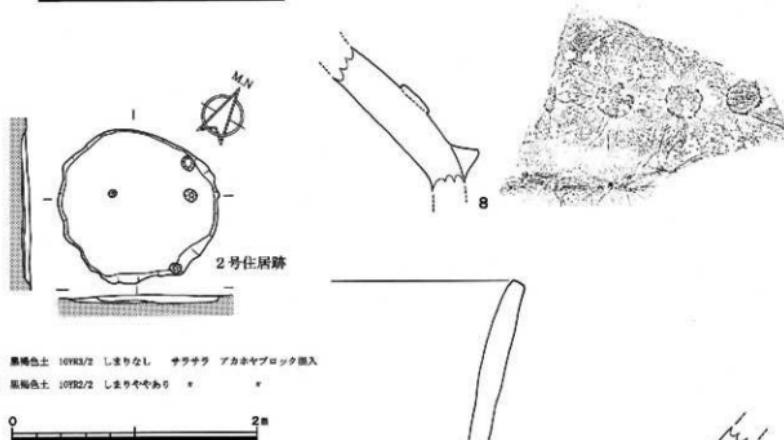
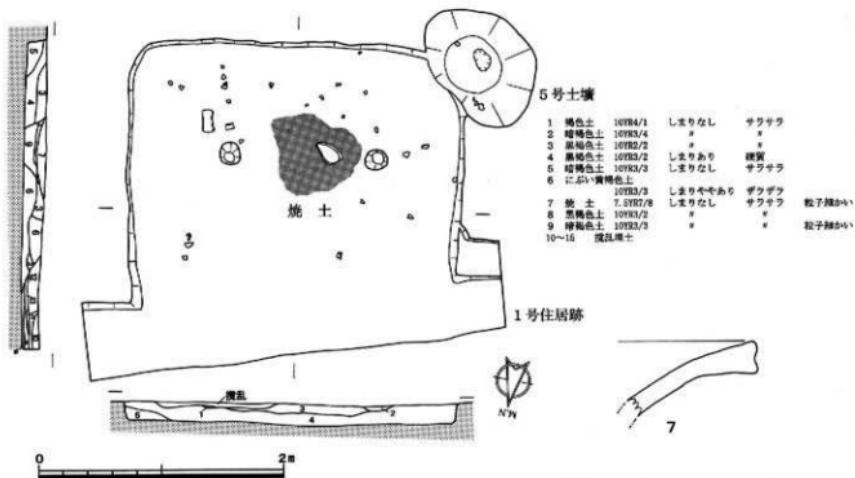


Fig. 6 第69地点堅穴式住居跡実測図
(s=1/40)

Fig. 7 第69地点堅穴式住居跡内
出土遺物実測図 (s=1/2)

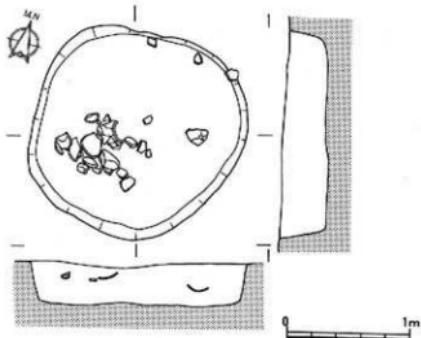


Fig. 8 第69地点 2号土壤実測図 ($s=1/40$)

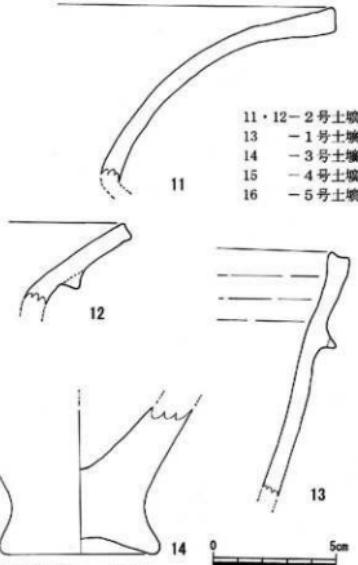


Fig. 9 土壤内出土遺物実測図 ($s=1/2$)

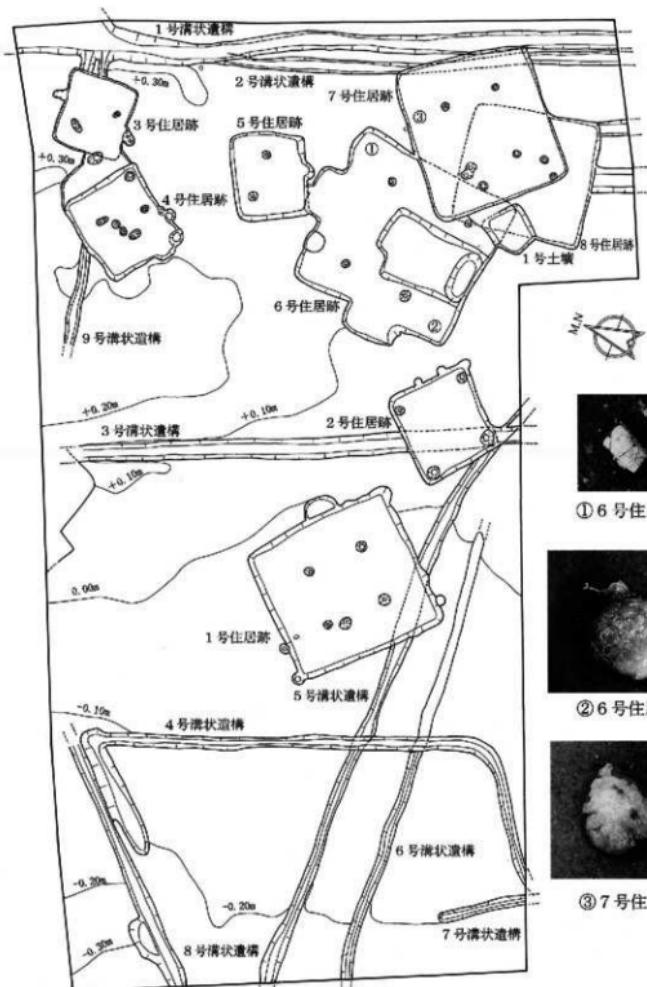
堅穴式住居跡は、単独で遺存しているもの（1号・2号・5号）と重複しているもの（3号・4号・6～8号）があるが、いずれも方形プランである。規模的には最小のものが3号で長軸3.21m・短軸2.74m・深さ約0.20m、最大のものは6号で長軸6.90m・短軸6.72m・深さ約0.40mを計る。床面は平坦で、主柱はないもの（3号）、2本のもの（2号・4号・5号・8号）、4本のもの（1号・6号・7号）がある。また、特色あるものとして、中央部に長方形状の掘り込みを有するもの、（6号）外側に長方形状に張り出しが有するもの（6号・8号）、竈を有するもの（3号）などがある。遺物は、多種多様バラエティに富んでいるが、量的には少ないもの（3号・5号）と多いもの（4号）がある。そのなかで、特徴的なのは算盤玉のような脛部を有した二重口縁の壺形土器（6号）、コップ状の形をした土器（6号）、小型丸底壺（7号）、表面を全面的にタタキで調整した壺形土器（7号）などがあるが、全体的には口縁部が若干外反した壺形土器が主体を成している。これらの遺物の特徴から、時期的には竈を有するものもあり7世紀以降のもの（3号）も含まれるが、全体的には古墳時代初頭から前期にかけてのものが中心となった堅穴式住居跡群であると推定される。

溝状遺構（Fig. 10）は9条検出しているが、後世のものがほとんどである。規模的には幅0.45m～0.80m、深さ0.14m～0.30mで、時期的には埋土の状態等から一番北側に位置している2条（1号・2号）が最も古いと思われるが、遺物は極端に少なく不明な点が多い。

土壤は、6号及び8号住居跡と切りあっている。規模的には長軸約2.0m・短軸約1.5m・検出面からの深さ0.35mを計る。セクションで観察すると住居跡より新しいもので、遺物は小型であまり口縁部の外反しない壺形土器などが出土している。時期的には古墳時代前期頃に比定される。

確認調査（第82地点）

本年度も昨年同様、畠地内に10mの間隔でトレーンチを設定し、重機により掘削を行った。アカホヤ火山灰層面及びアカホヤ火山灰下層はサブトレーンチにて遺構・遺物の遺存状況の確認を行ったが、いずれも検出することはできなかった。



- ・コンタは任意のレベル高である
- ・丸数字は出土地点で図面と対応する

0 10m

Fig. 10 第81地点遺構分布状況 ($s=1/200$)

第3節 小 結

西都原台地では、近年の童子丸墓地造成に伴う発掘調査（新立遺跡）をはじめ、圃場整備等に伴い行った大規模な発掘調査（西都原地区遺跡⁽¹⁾）や昨年度までのたばこ耕作に伴い実施した発掘調査（西都原地区遺跡⁽²⁾）、道路拡幅工事等の各種開発行為に伴う発掘調査（寺原第1遺跡・寺原第4遺跡・西都原遺跡⁽³⁾）によって様々なことが判明してきた。

新立遺跡では、縄文時代早期の集石遺構や古墳時代初頭頃の竪穴式住居跡を検出した。また、西都原地区遺跡では、新立遺跡同様縄文時代早期の集石遺構をはじめ、弥生時代中期から古墳時代初頭頃の竪穴式住居跡や古墳時代後期の横穴墓群、さらには中世の掘立柱建物跡などを検出した。

このような中、今回の調査で竪穴式住居跡を10軒検出した。特に第69地点で検出した円形プランの竪穴式住居跡は、縄文時代晚期のものと推定され、西都原台地上ではほとんど類例がなく注目される遺構である。市内においても縄文時代の遺構で、しかも、竪穴式住居跡に限られると早期の鴨目原遺跡⁽⁴⁾検出のものぐらいで極端に少ない。このようなことからも、晚期の竪穴式住居跡の発見は初めてであり、極めて貴重な資料である。

また、第69地点のアカホヤ火山灰下層から出土した縄文土器は早期前半の貝殻条痕文系土器で、1号支線道路から出土したものと器種や施文方法などかなり類似している。これは、調査地点が近いということもあるが、本調査地の西約400mには早期前葉から中葉にかけて広く展開する押型文系土器が主体で土器構成が成されている地城（第10・11地点）がある。このように、極めて近い地域でありながら、異なる土器様式を保有しているのは、早期が持つ長い時間のなかで若干の時期差を示しているのではないかと思われるが、いずれにしてもお互いがあまり影響を受けないまま遺存していることは非常に興味が持たれる。

また、第81地点からは8軒もの竪穴式住居跡を検出したが、現状保存となった本地点の北側畠地にも、かなりの数の竪穴式住居跡が遺存していることを確認している。さらに、その北側の東西に延びている道路についても平成5～7年度の圃場整備に伴う道路改良工事（27号支線道路）の際、総計21軒もの竪穴式住居跡を重複して検出している。時期的には、第81地点のものが古墳時代初頭から前期のものが中心であり、27号支線道路の竪穴式住居跡群とほぼ同時期に比定される。

遺構密度的には、弥生時代の竪穴式住居跡が西都原台地の北部・中央部・南部にまたがっているものの薄いのに比べ、古墳時代特に初頭から前期前半になると新立遺跡や本地点を中心とした地城に多く分布するようになり、全体的に非常に高くなっている。このようなことから、古墳時代になるとかなりの人たちが流入し大集落が形成され、生活環境が変化したと同時に繁栄してきたことがこのことからも理解できる。

ところが、前期の後半以降となると極端に検出例が少なくなる。この時期は西都原古墳群が盛んに築造される頃と重なっており、いわゆる台地上は聖地として認識して、生活空間の移動が行われたものではないかと思われ、そのことを示すかのように西都原台地東側中間台地の酒元遺跡などから竪穴式住居跡が検出されているが、全体的な様相を明らかにするにはまだまだ資料に乏しく、今後の大きな課題である。

たばこ天地返しに伴う調査は本年度で終了したが、これまでに82地点もの確認調査と6地点の本調査を実施してきた。これらの調査によって、様々なことが判明し報告してきたが、まだまだ未解明な部分が多いというのも現状であり、今後実施される発掘調査等によって、さらに検討していくなければならないと考える。

第IV章 日向国分寺跡の調査

第1節 これまでの調査結果と概要

日向国分寺跡については、前述のとおり、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団、また、昭和36年及び平成元年度には宮崎県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査箇所は明示できないが、昭和36年の調査は旧五智堂及びその南側を中心に、平成元年度には寺域の北側にあたる部分（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。昭和23・36年の調査は、短期間であったことから伽藍配置については明確にされていない。しかし、平成元年度の宮崎県教育委員会による調査では食堂跡と推定される2時期の掘立柱建物跡が確認されている。

その後、平成7年度から西都市教育委員会が遺跡保存確認調査を実施し、今年度で第9次になる。

平成7・8年度の調査では、金堂の掘込事業跡と推定される遺構や推定回廊跡、さらに、推定回廊外側に廻らされていたと推定される溝状遺構（区画溝）が検出されている。

平成9年度は、主要伽藍に取り付くと予想される四脚門の存在が確認でき、西門北側からは南北に延びる区画溝（SE002）が検出され、この溝は主要伽藍を取り囲むように廻ると予想された。

平成10年度は、以前確認されていた並行したピット列が回廊跡と確定され、最低でも3時期の建て替えが判明した。また、この調査で主要伽藍南側区画溝の東西幅が約84mと判明した。

平成11年度は、平成7年度にトレングリッド調査を実施した中門想定箇所に一辺10m程の調査区を設定し、中門跡約東半分を検出した。中門も回廊同様最低3回の建て替えが判明した。

平成12年度は、東門及び金堂の掘込地業想定箇所を再度調査したが、後世の擾乱のため断定するまでには至らなかった。塔想定箇所である主要伽藍南東側も遺構等は確認できず、南門に関しては築地塀の基壇らしき粘土層が確認でき、調査区東側に南門が所在する可能性が高くなった。

平成13年度は、平成元年度に宮崎県教育委員会が調査した推定食堂跡の未調査箇所を調査した結果、2時期の掘立柱建物跡であることが確定できた。但し、推定食堂の西端に関しては、平成9年度の調査で、現在民家の進入路になっている道路までは延びないことも明らかになっている。

平成14年度は、調査を寺域西端隅の確認に限定し、寺域を方2町と推定した場合の隅と予想される箇所及び寺域の南西部に位置する谷の内側で寺域が北東側に曲がる可能性もあることから、これらの2箇所に寺域端を想定し調査を実施した。調査の結果、寺域端を示すような遺構は確認できなかつたが、想定寺域南西端に国分寺と同時期で地割りも一致するL字状の溝状遺構が確認できた。

今年度の調査は、平成元年度調査（宮崎県教育委員会）及び平成13年度調査（西都市教育委員会）により食堂跡と推定されている土地及び東西道路南側の駐車場などに宅地開発の危機が迫り、この周辺一帯を早急に国指定にすることが急務となったことから、このような状況を踏まえ文化庁・宮崎県教育委員会と協議した結果、伽藍中心部の調査を重点的に実施し、中央建物跡の確認を最大の目的とし調査を実施した。

今年度は、国分寺跡中央を横断する東西道路（市道）の北側（推定中軸線上）に所在する平成9年度に確認調査を実施した土地をA区、東西道路南側（主要伽藍東側）の木喰五智館駐車場として借地している箇所をB区、平成9年度の調査で四脚門及び区画溝（SE002）が確認されている箇所をC区とし、この3区を対象に調査を実施した（Fig.11参照）。

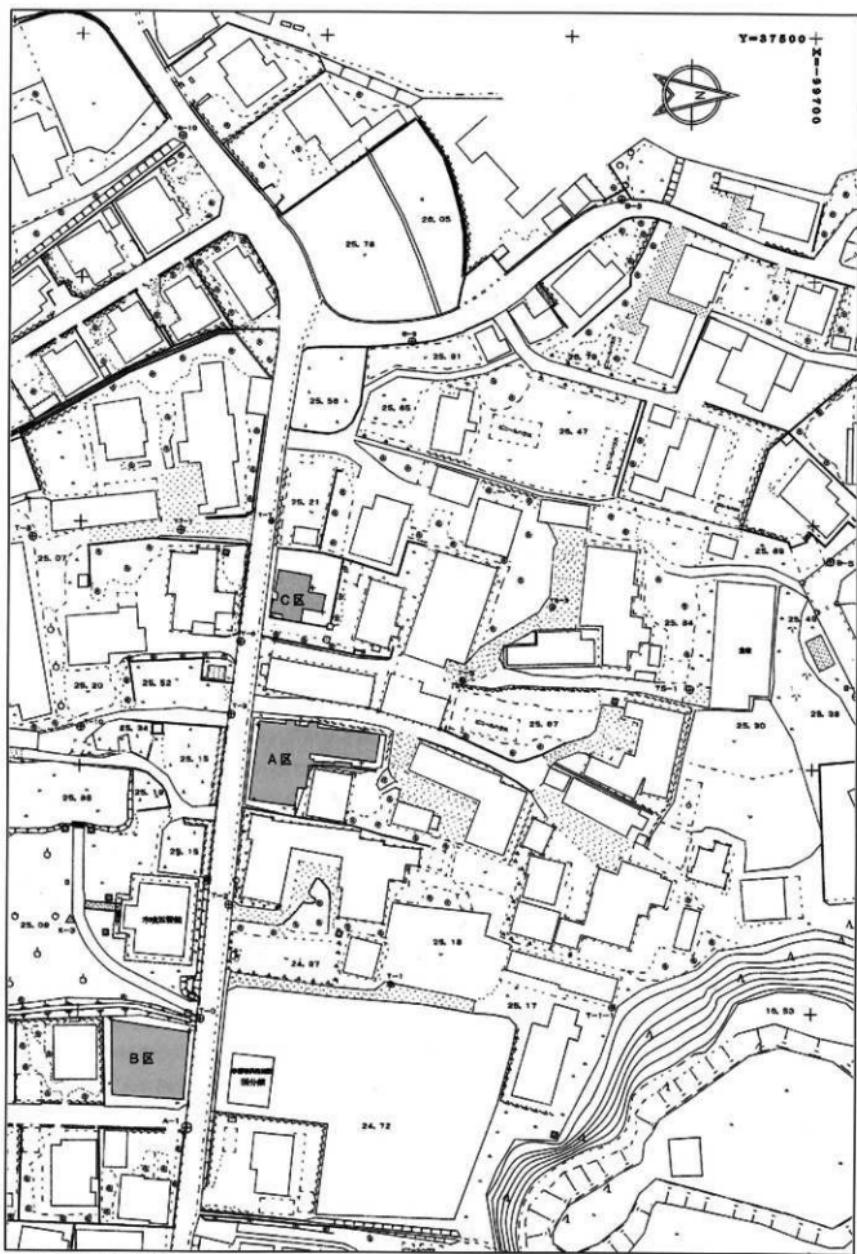


Fig. 11 日向国分寺跡第9次調査箇所位置図(s=1/1,000) 1 10 20 30 40 50

第2節. 調査区の設定と遺構

《A区の調査》Fig. 12

A区（平成9年度調査時B区）は、平成9年度に幅1～2mのトレーナーを3本設定し調査を実施したが、トレーナー幅が狭小であったことから、再度確認調査を実施した。本地区は中門跡・回廊跡などから復元された主要伽藍の中軸線が位置する箇所であり、金堂跡ないし講堂跡が確認される可能性が高く、現在、民家の庭として空き地になっている箇所を調査面積も十分に確保できたことから、最終的には東西7.5～17.5m、南北9.3～24.8mの約240m²を調査区とした。

調査の結果、調査区北東側から方形及び円形の柱掘り方列が検出された。方形の柱掘り方は、一辺約1.0～1.5mではほぼ正方形プランを呈す。掘り方の床面と想定される上面には直径30～60cmの柱穴痕が確認され、柱穴内には黄白色粘土が充填されているもの、瓦片が充填されているもの、黒褐色土で充填されているものなどが確認された。黄白色粘土で柱穴を充填している例は、中門跡や回廊跡でも多く認められる。また、日向国御跡でも同様の例が確認されており、建物を建て替える段階で日印的に埋められたものではなかろうかと推定している。

東西に延びる方形の柱掘り方は、柱穴痕で計測すると240cm間隔で並び8尺の桁行きで穿たれていることが明らかになった。また、確認された南側柱掘り方の西端から北側に関しても同様の柱掘り方が確認できたが、柱間にばらつきがある。現段階では前面から240cm（8尺）、255cm（8尺5寸）、300cm（10尺）、300cm（10尺）の4間となるが、基本的に内陣・外陣の柱間は同間になると予想されることから建物構造と併せて再度検討しなければならない。これら柱間を活かすと桁行き7間・梁行き4間の四面庇の建物と推定され、講堂跡の可能性が高い。規模は柱間で東西14.8m、南北10.95mになる。また、西及び北面の外陣・内陣は掘立柱建物としての柱掘り方が明確であるが、南側の内陣に関しては柱掘り方が全く確認できなかった。これに関しては推測の域を脱せないが、現段階では南側外陣の柱掘り方基底面が10～20cmと浅く、後世の開発により80～90cm程度が削平されていると予想されることから、本来は基壇が存在し、基壇上から柱掘り方が掘り込まれ、南側内陣のみ礎石建物の構造を採用していたが、根石・掘り方ごとに削平されたと想定せざるを得ない。

一方、円形の柱掘り方は径1.0～1.4m程の楕円形プランを呈す。南側の柱掘り方列に関しては、掘り方が北側上方から南側下方に斜めに穿たれていることから、柱自身は北側から建てられた可能性が高い。柱穴痕が確認されている掘り方には黄白色粘土が充填されており、幅30～40cmの楕円形である。これに関しては建立時に柱を建てた向きに左右されているかもしれないが、抜き取り時に前後に振った結果、このような楕円形の柱穴痕が形成された可能性が高いと予想される。

円形の柱掘り方は、柱穴痕で計測すると、南側最前面の桁行きは270cm（9尺）間隔で穿たれていることが明らかになった。但し、梁行きに関してはばらつきがあり、前面から420cm（14尺）、360cm（12尺）となる。円形の柱掘り方は確認できなかったが、方形の柱掘り方を転用していると想定すると420cm（14尺）北側の柱穴痕が該当する。したがって、桁行き7間・梁行き2間ないし3間の建物が想定される。このことから、切妻の建物か三面庇の建物が想定され、規模は柱穴間で桁行き18.9m、梁行き8.8mないしは12.0mの建物と復元される。

どちらの掘立柱建物跡に関しても調査地の制限や後世の攪乱などにより、現段階では明確な構造を断定するまでには至っていない。本調査区は現在も調査を継続中であり、今後の遺構の精査により、より具体的な建物構造を検討する必要がある。

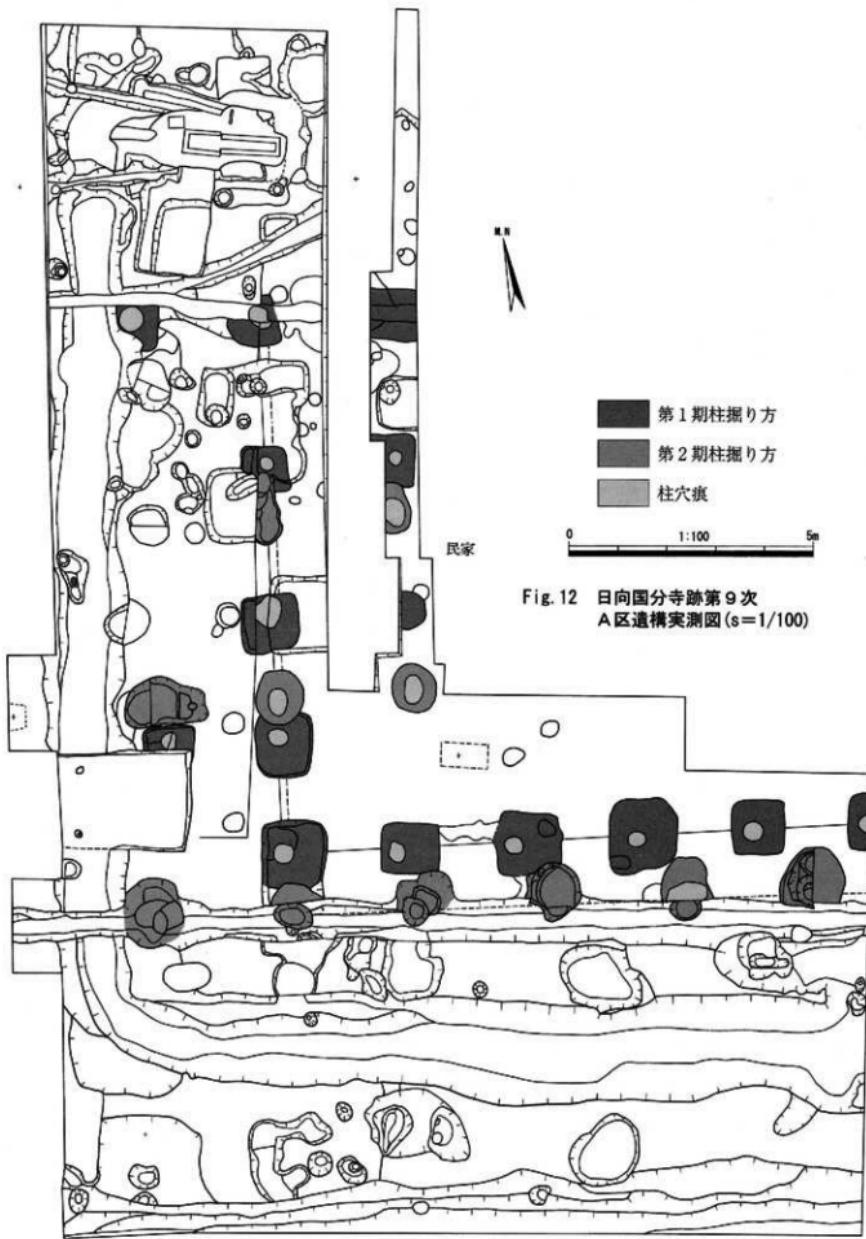


Fig. 12 日向国分寺跡第9次
A区遺構実測図 ($s=1/100$)

(B区の調査) Fig. 13

B区は日向国分寺跡を横断する東西道路南側、主要伽藍東回廊跡の東側に所在する駐車場に設定した。当該地は今年度、売却の恐れが生じたことから西都市が約320m²を買収し、日向国分寺跡及び木喰五智館来客者用の駐車場及びトイレを新設することにし、調査を実施することとした。

調査は南北14.7~16.2m、東西14.1~15.3mの約230m²を調査区とした。但し、調査区南東側の約50m²に関しては、南側の溝が近世の溝であることが明らかになったことから今回は全掘せず、表面での溝幅の調査にとどめた。

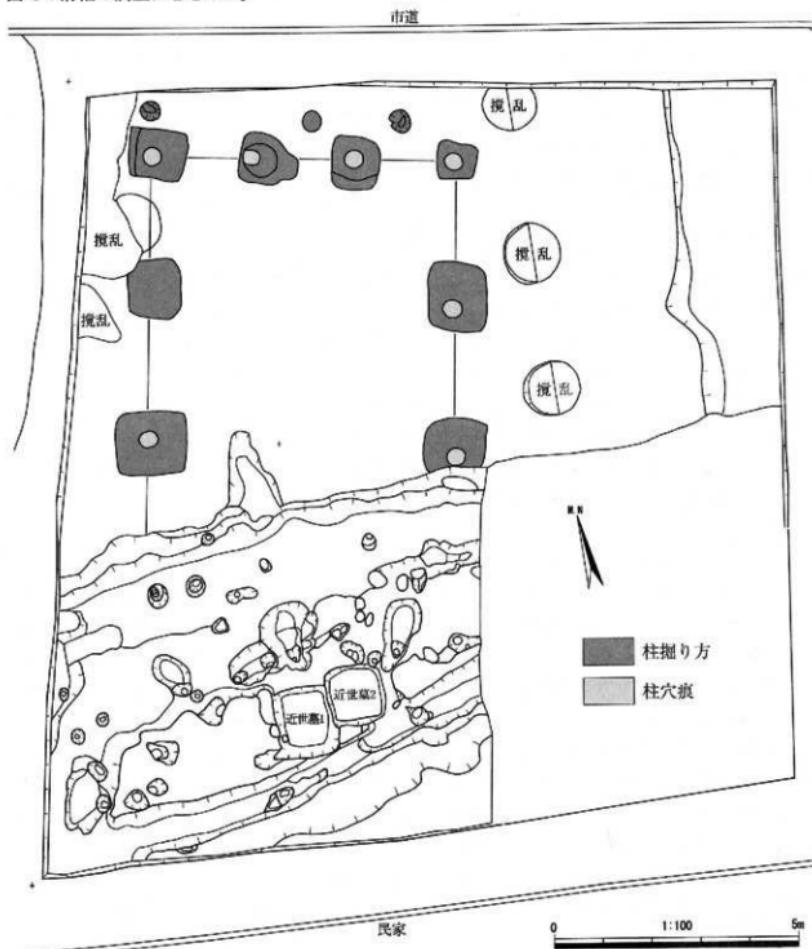


Fig. 13 日向国分寺跡第9次B区遺構実測図(s=1/100)

調査の結果、方形の柱掘り方を有する柱穴列が確認された。確認された柱掘り方は8個であり、一辺約70~140cmとばらつきがある。西側柱穴列の中央柱以外の柱掘り方ほぼ中央には径約40cmの柱穴痕が確認され、柱穴内には黄白色粘土が充填されていた。軸は創建期の伽藍配置に対応し、この施設は国分寺が創建期の伽藍配置で機能している間に建てられた可能性が高い。柱掘り方の深さは10cm程と浅く、約90cm程が後世の開発により削平されているものと想定される。柱穴痕に関しては、今回の調査では半裁などの掘削を実施していないことからピンボールステッキの調査になるが、深さは約15~50cmと計測できた。北面の柱穴列の内側の2個の柱穴痕の深さは約50cmと深く、主柱としての機能をもっているのだろうと予想される。

建物の柱間は梁行き3間、桁行き2間以上になり、おそらく南北に長い建物になると予想される。柱間の間隔は梁行き210cm(7尺)、桁行きは東側で300cm(10尺)を測る。但し、西側に関しては検出された柱掘り方の2番目の柱穴痕が確認されず、北端と南端の柱掘り方内柱穴で計測すると58.0cm(約19尺3寸)と左右対称ではないようである。また、北面の柱穴列北側には径40cm程の円形柱穴が3個確認され、北側に庇を伴う可能性も残る。これらから復元すると、南北二面庇の掘立柱建物の可能性が高い。

このように主要伽藍外南東側に掘立柱建物が確認された例としては、安芸国分寺跡で「東方建物群」として紹介されている掘立柱建物跡などの例がある。この建物は平成12年度の確認調査で、数棟の建物跡と予想される遺構が検出され、墨書き器も数点出土しているが、建物の内容に関しては明らかにされていない。本寺の場合も南側の近世の東西溝状遺構から瓦片が多量に出土したのみで、建物の性格を示すような遺物は検出できなかった。この近世の溝状遺構は幅約6.0m、深さ約70cmを測る。この溝内からは瓦片や近世陶磁など約500点が出土し、方形の掘り方を有する近世墓が2基確認できた。これら2基の近世墓からは、寛永通宝が数点ずつ出土したのみである。

この溝により北側で確認された掘立柱建物の南側柱穴は削平されたと予想され、北側建物の南辺に関しては確認することができず、桁行きに関しては不明である。

(C区の調査) Fig. 14

今年度の調査開始時、A区で中軸線にのる梁行7間と推定される掘立柱建物跡の柱掘り方が検出されたことから、C区(平成9年度調査時A区)で平成9年度に確認されていた四脚門が、この建物跡(推定講堂跡)に取り付く回廊跡の北西隅である可能性も想定された。但し、A区で確認された円形及び方形の柱掘り方を有する柱穴列線上とC区の四脚門の北側柱穴列とでは、南北に3.0m(10尺)程度のずれが生じ、回廊が建物の接合部あたりで北側に曲がる形状に復元されることになった。このような伽藍配置の形状については疑問視されたことから、今年度のA区南側最前列の円形柱掘り方及び方形柱掘り方と、C区に平成9年度確認されている四脚門との接続関係を再度考察する目的から再度調査を実施した。調査は平成9年度調査を実施している箇所の東側を中心に調査区を設定し、当時調査を実施していない東側及び北東側を拡幅し、四脚門北側の柱穴を探ることにし、最終的には南北3.8~10.4m、東西3.5~9.8mの約74m²を調査区とした。

調査の結果、四脚門の北側柱穴列中央柱の北側延長線上に120cm(4尺)離れて直径約80cmの円形柱掘り方が1個及び210cm(7尺)離れて直径約90~100cmの円形柱掘り方が1個確認された。前者の柱掘り方は検出面から3.5~7.0cm程掘削した段階で底が検出され、柱穴痕は遺存していないかっ

た。後者の柱掘り方にはほぼ中央に径約40cmの円形の柱穴痕が確認でき、柱穴内には黄白色粘質土が充填されていた。柱掘り方及び柱穴痕に関しては半裁などの掘削は実施せずピンポールステッキの調査になるが、柱掘り方は深さ約20cm、柱穴痕は深さ約30cmと計測できた。この北側の柱掘り方は、A区の南側最前列の円形柱掘り方とほぼ同一線上に並び、このラインで何らかの囲い施設が巡る可能性も示唆されたが、A区とC区間は道路及び倉庫などにより調査が実施できない。したがって、これら柱間を繋ぐ施設の存在は推測の枠を脱せないが、円形柱掘り方から推定される2期目の講堂と主要伽藍に取り付く四脚門北側の円形柱掘り方間に塀などが所在していた可能性は残る。また、四脚門北側柱穴列中央の主柱とその北側の円形柱掘り方列の延長線上には、前回の調査でも確認できなかったが、柱穴や築地塀の痕跡は確認できなかった。但し、北側は現地形がかなり削平されていると予想され築地塀や簡易な塀などが所在していた可能性は残る。

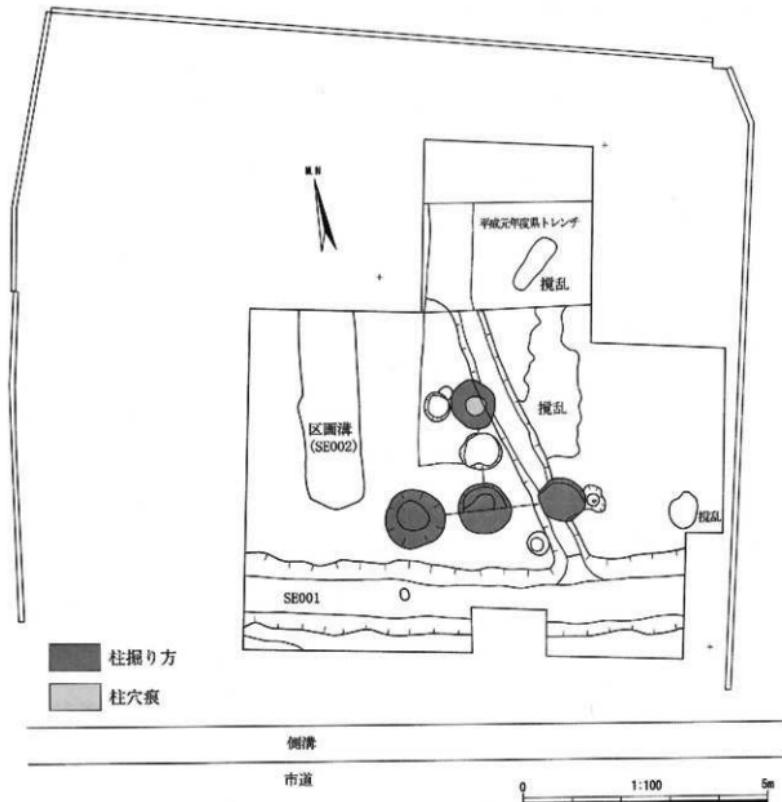


Fig. 14 日向国分寺跡第9次C区遺構実測図($s=1/100$)

第3節 小結

今年度の日向国分寺跡の調査は、平成15年7月22日から平成15年3月末まで実施する予定で現在も調査中である。西都市教育委員会が国庫補助を受け実施する日向国分寺跡の調査は、平成7年度から実施しており、今年度で第9次になる。今年度の日向国分寺跡の調査は、金堂跡及び講堂跡などの主要伽藍内中心建物跡の確認を最大の目的とし調査を実施した。

昨年度までの調査で主要伽藍を廻ると予想される溝状遺構（区画溝）や推定金堂の掘込地業想定箇所、主要伽藍に取り付く四脚門跡、主要伽藍南東側の回廊跡が最低3時期存在していたこと、また、中門も回廊同様、最低3時期存在していたことなどが判明した。中門は1・2期目の建て替え時は回廊同様掘立柱建物であったが、3期目に建て替えられた段階では礎石建物となり規模も拡大し、回廊の外側を取り巻く溝状遺構（区画溝）が埋没した後に建立されていることなどが判明した。主要伽藍に取り付く東門跡は攪乱が著しく、塔跡に関しても基壇と想定される遺構等は確認できていない。また、推定金堂の掘込地業想定箇所に関しては、現在、墓地が周囲に所在しており攪乱が著しく、礎石痕跡の確認や掘込地業跡であると断定するまでは至っていない。南門想定箇所に関しては、南門に取り付くと想定される築地塀の基壇らしき粘土層が確認できたが、南門本体の遺構は検出されていない。また、寺域端に関しては北・西端ともに宅地化がかなり進んでおり調査設定箇所の制限や後世の攪乱により遺構等を明確にすることはできなかった。推定寺城南西端からは寺城端を示すような遺構は確認できなかつたが、日向国分寺と地割りを共にするL字状の溝状遺構が確認された。また、簡易な窯跡らしき遺構も確認されている。推定寺城西側からは平安期の土器・瓦片等が多く出土しており、周辺にはかなりの生活遺構が拡がっていることなども明らかになっている。また、以前より食堂跡とされる掘立柱建物は2時期存在していたことが確定できた。

今年度の調査は、金堂跡及び講堂跡の確認を最大の目的とし調査を実施した。国分寺跡を横断する東西道路（市道）の北側（推定中軸線上）に所在する平成9年度に確認調査を実施した空き地をA区、東西道路南側（主要伽藍伽藍東側）の駐車場をB区、平成9年度の調査で四脚門及び区画溝が確認されているC区の3箇所を対象に調査を実施した。

調査の結果、A区から方形及び円形の柱掘り方を有する桁行き7間、梁行き3間ないし4間の推定講堂跡を確認することができた。昨年までの調査では、講堂はまだ北側に位置すると想定していたが、今回の調査で想定箇所より南側に所在することが明らかになり、金堂跡に関しても東西道路南側の市営墓地に所在する可能性が高くなった。この周辺には当時の礎石と予想される安山岩が3石程度点在している。また、B区からは方形の柱掘り方を有する東西3間、南北3間以上の掘立柱建物跡が確認され、C区では平成9年度調査の四脚門北側に取り付く柱穴が確認された。

今回、新たな資料が増えたことは、今後、調査箇所の設定や日向国分寺跡の全貌を解明するために大きく反映されることと思われる。

来年度の調査は、以前までに数度確認調査を実施してきた金堂跡及び塔跡の確認を最大の目的とし、寺城端や南門の遺構の確認も併せて実施していく予定である。

近年、日向国分寺跡周辺もかなり宅地化が進み、調査箇所の制約が進んでいることに併せて、以前までに確認してきた重要な遺構包蔵箇所も開発の危機にさらされているのが現状である。今後、早急に国指定史跡としての指定と将来の遺跡の保護・活用を見据えた構想及び現況の確保が大きな課題となる。

第4節 日向国分寺跡の伽藍配置について

平成12年度の概要報告書の中で当時までの調査結果を踏まえ、主要伽藍配置の復元を試みた。しかし、今年度調査を実施したA区で検出された掘立柱建物跡が講堂跡と予想され、当時の復元案から変更する必要が生じ、今回、寺域及び伽藍配置の復元を再度実施した(Fig. 15参照)。

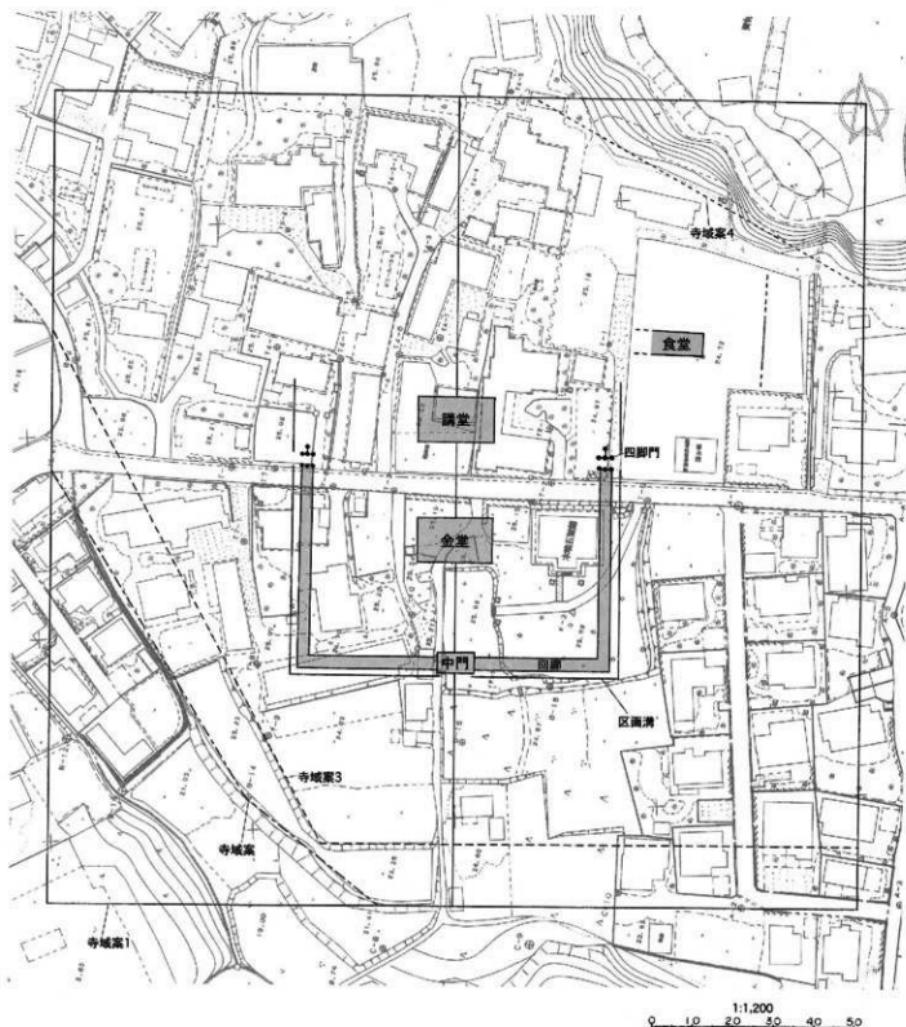
まず、回廊外側を廻る区画溝は南東隅が検出され、南西隅はその北・東側の調査で復元できた。従って区画溝中央の距離で計測すると区画溝の東西幅は約82mである。創建期及び第2期目の回廊は、この区画溝内に納まる。但し、3期目の回廊は回廊南東端の調査で区画溝を埋めた後に柱掘り方が掘削されていることから区画溝内には納まらない。回廊は金堂及び講堂に取り付く形状ではなく、伽藍西側の回廊に取り付く四脚門と接合すると推定しているが、金堂跡が確定できないことから東西道路下に回廊が位置する可能性も残る。西側の四脚門前面(西側)で区画溝は途切れ、門への通路を確保する。四脚門の北側に関しては不明な点が多いが、今年度の調査により四脚門北側柱穴列中央の主柱北側延長に円形柱掘り方が検出され、門から北側に堀が存在していたと思われる。但し、この柱掘り方の北側延長には同様の柱穴等は検出できず、築地堀らしき痕跡も確認できない。

さて、今年度の調査で推定講堂跡とされる掘立柱建物跡が2時期確認できた。1期目の講堂は上記のように建物構造上問題も残るが、方形柱掘り方を有する桁行き7間・梁行き4間の建物であったと想定する。但し、講堂の内陣のみが礎石建物構造である例は他になく検討を要す。講堂が掘立柱建物跡である例も少ないが、屋根の一部のみが瓦葺きであった可能性はある。次に2期目の講堂は円形柱掘り方を有する桁行き7間・梁行き2間ないし3間の掘立柱建物跡である。梁行きが2間ないし3間と確定できない理由は、上記したように3間に該当する北側の柱掘り方が1期目の柱掘り方を転用している可能性が残るからである。梁行きが2間であれば切妻建物、3間であれば三面庇の構造になるであろう。これら柱掘り方から講堂の規模を復元すると1期日の講堂は柱間で東西幅16.8m・南北10.95m、2期日の講堂は東西幅18.9m・南北8.8mないし12.0mの規模となる。

講堂の位置が想定できしたことから改めて金堂の位置を検証すると、平成8年度に金堂の掘込地業跡と予想された地点が重視される。また、この場所は東西道路に面した南側に位置し、礎石と予想される安山岩3石が所在する。これら安山岩は元位置を保っていないと予想されるが、この位置に講堂と同規模建物を配することは可能である。但し、現在、市営墓地となっており近世から墓地として使用されてきたことから調査は困難であり、当時の遺構が遺存する可能性も薄い。

また、回廊及び中門は最低3時期の建て替えが行われ、3期目で最大規模の主要伽藍を築き上げる。この時点で回廊の桁・梁行きは一間3.0mとなる。また、3期目の中門は中軸線が確定されたことから西側に折り返すと東西幅約9.0m、南北約5.4mになる。この時期には中門は礎石建物へと変化する。同時期に寺域全体の中軸線は東に振られ、講堂は建て替えられ、回廊も外側に拡大するなど、伽藍全体が大幅に変更されることから日向国分寺の大再建期と予想される。

今回、寺域に関しては復元を試みた。寺域は以前から方2町と想定されてきたことから中軸線を用い寺域を推定した場合が寺城案1である。但し、寺城南西隅に関しては、平成14年度に調査を実施したが、寺域に関連すると予想される遺構は確認できなかった。また、この箇所の北東側には谷が入ることから、その内側に堀などを廻らす寺城案2・3も想定してみた。寺城案3を採った場合、南門は想定箇所より北側に所在する可能性が浮かぶ。また、寺城北東側は急斜面になり、その下には、以前、池が所在していたことから斜面上端で堀を廻らす寺城案4も想定している。



日向国分寺跡推定伽藍復元図 (s=1/1,200)

図 版

(PLATES)

図版目次

—西都原地区遺跡—

卷頭 P.L. 1

西都原地区遺跡(第69地点周辺)遠景(北上空より)

P.L. 1

1. トレンチ調査状況(第82地点)
2. アカホヤ火山灰下層調査状況(第82地点)
3. 第69地 点遠景(南東上空より)

P.L. 2

4. 第69地点 1号集石遺構検出状況
5. 第69地点 2号集石遺構検出状況
6. 第69地点 遺構分布状況(真上より)
7. 第69地点 2号住居跡検出状況
8. 第69地点 2号土壤検出状況

P.L. 3

9. 第69地点 出土遺物
10. 第69地点 出土遺物
11. 第81地点 遺構分布状況(北より)
12. 第81地点 遺構分布状況(南より)

—日向国分寺跡第9次—

卷頭 P.L. 2

日向国分寺跡第9次A区全景(南上空より)

P.L. 4

13. A区遺構検出状況(南西より)
14. A区掘立柱建物跡西側柱穴列検出状況(南より)
15. A区掘立柱建物(推定講堂)跡検出状況(真上より)

P.L. 5

16. B区掘立柱建物柱穴検出状況(南西より)
17. B区掘立柱建物柱穴検出状況(真上より)
18. B区遺構・遺物検出状況(南西より)
19. B区掘立柱建物柱穴検出状況(東より)

P.L. 6

20. C区主要伽藍西側四脚門検出状況(真上より)
21. A・C区遺構検出状況(真上より)



1. トレンチ調査状況(第82地点)



2. アカホヤ火山灰下層調査状況(第82地点)



3. 第69地点　遠景(南東上空より)



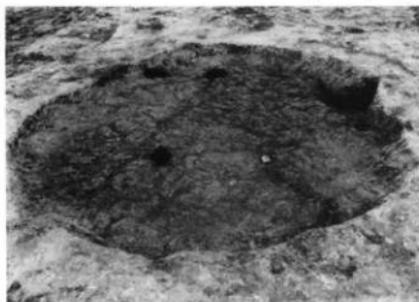
4. 第69地点 1号集石遺構検出状況



5. 第69地点 2号集石遺構検出状況



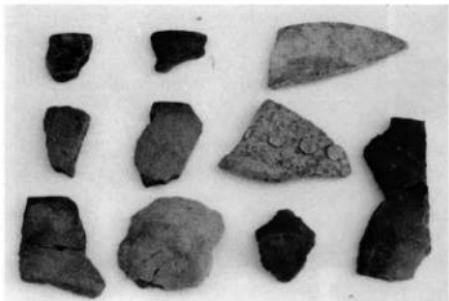
6. 第69地点 遺構分布状況(真上より)



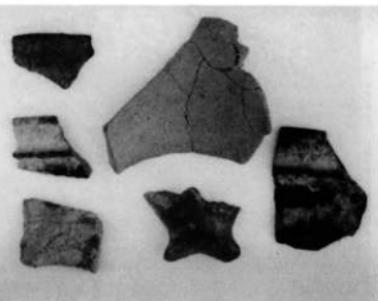
7. 第69地点 2号住居跡検出状況



8. 第69地点 2号土壤検出状況



9. 第69地点 出土遺物



10. 第69地点 出土遺物



11. 第81地点 遺構分布状況(北より)



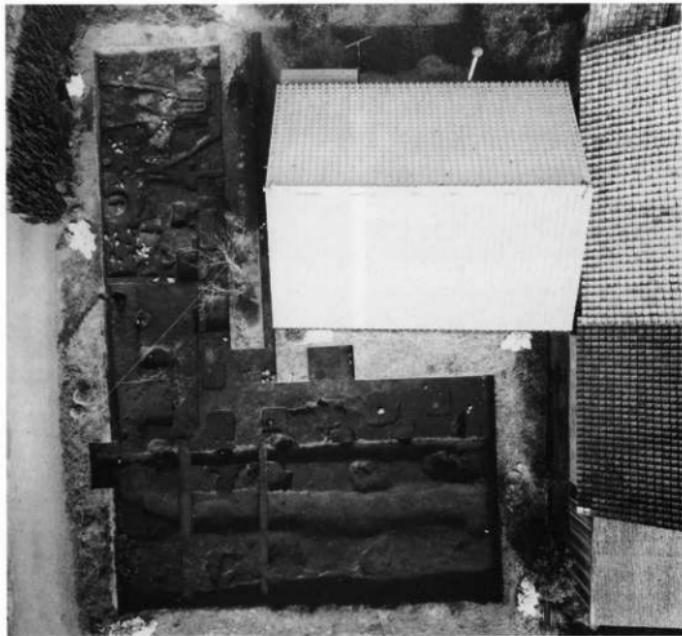
12. 第81地点 遺構分布状況(南より)



13. A区遺構検出状況(南西より)



14. A区掘立柱建物跡西側柱穴列検出状況
(南より)



15. A区堀立柱建物(推定講堂)跡検出状況(真上より)



16. B区堀立柱建物跡柱穴検出状況(南西より)



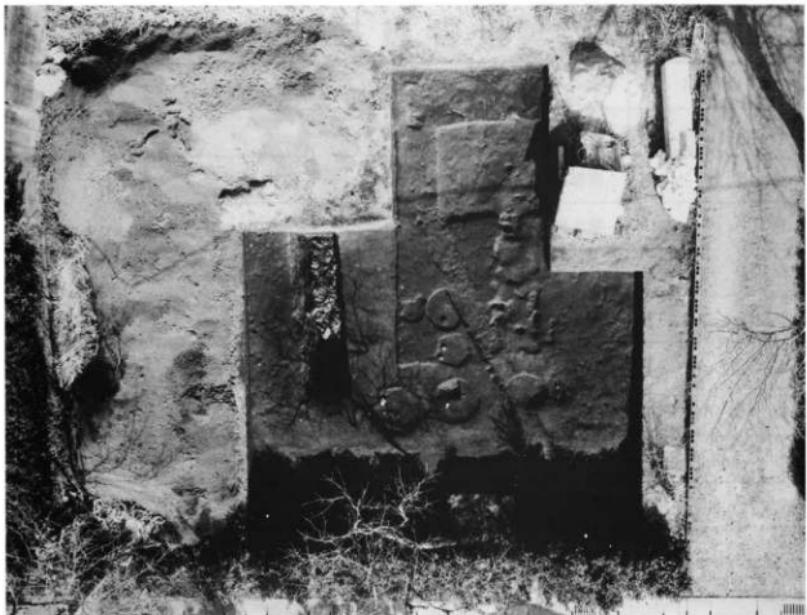
17. B区堀立柱建物跡柱穴検出状況(真上より)



18. B区遺構・遺物検出状況(南西より)



19. B区堀立柱建物跡柱穴検出状況(東より)



20. C区主要伽藍西側四脚門検出状況(真上より)



21. A・C区遺構検出状況(真上より)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはくつちょうきかいようほうこくしょ					
書名	市内遺跡発掘調査概要報告書					
副書名	西都原地区遺跡・日向国分寺跡					
卷次	第9集					
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ番号	第40集					
編著者名	養方政幾・笠瀬明宏					
編集機関	西都市教育委員会					
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市塙陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111					
発行年月日	西暦 2004年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)
さいとうちくいせき 西都原地区遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおたけいわだらばるわき 大字三宅字寺原脇他	452084 1026 1029	X = -99000.00 l X = -97000.00	Y = 36000.00 l Y = 36800.00	20020806 l 20030117	2,600
ひゅうがこくぶんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おあざみやけあこくぶ 大字三宅字国分	452084 1008	X = -99790.00 l X = -99845.00	Y = 37605.00 l Y = 37720.00	20030722 l 20040331	560
調査原因	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項	
たばこ耕作 天地返しに 伴う調査	集落跡	縄文～中世	集石遺構 竪穴式住居跡 溝状遺構 土壤	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石器		
遺跡所在確認に 伴う確認調査	社寺跡 (国分寺)	奈良～平安	掘立柱建物跡(推定講堂跡) 掘立柱建物跡 主要伽藍西側四脚門 近世墓(方形)2基	軒先瓦片 丸・平瓦片 土師・須恵器片 陶磁器片 鉄滓		

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第40集
「市内遺跡発掘調査概要報告書IX」
西都原地区遺跡・日向国分寺跡
平成16年3月31日発行
編集発行 西都市教育委員会
印刷所 吉永印刷
